

# 第 145 回 列強のアフリカ分割①

## 1 列強のアフリカ進出のはじまり

- かつて「暗黒大陸」と呼ばれ、未知の地域であったアフリカでは、19世紀初頭までにポルトガル・イギリス・フランスなどが沿岸に植民地を建設していた。
- また（ ）や（ ）の探検によって内陸部の事情が明らかになると、列強のアフリカ進出が本格化していった。

- （ ）国王の（ ）は、資源の豊富な（ ）を私有地として領有しようとした。  
→他のヨーロッパ諸国はこれに反発した。  
→1884年、ドイツ帝国の宰相（ ）によって（ ）が開催され、「先に実効支配して通知した国が領有できる（先占権）」ことを確認した。  
→ベルギーは国王の私有地として（ ）を建設し、植民地とした。



ベルギー王で、スタンリーを支援してコンゴを探検させていた。ここで儲けた金で、ブリュッセルに宮殿を建てた。



真ん中で「アフリカ」と書かれたケーキを切ろうとしているのが、ドイツ宰相ビスマルク。要するに、早い者勝ちということを決めたのである。



レオポルド2世は、黒人にノルマを課して、達成できなければ手首を切り落とすなど、とんでもないことをやっていた。

ベルギー国王レオポルド2世

ベルリン会議の風刺画

コンゴの黒人

## 2 イギリスのアフリカ進出

- イギリスは、19世紀の時点ですでに（ ）への連絡通路として重要な、（ ）と（ ）を植民地としていた。

- イギリスは、インドの（ ）・エジプトの（ ）・ケープ植民地の（ ）を結ぼうとする（ ）を行った。  
→その一貫として、アフリカでは北から南までを結ぶ（ ）を展開した。
- 1869年以降、イギリスは（ ）への進出を続けていた。  
→1881年、ムハンマド=アフマドは、自らを（ ）であると宣言し、イギリスに対して武装蜂起した。  
※これを（ ）という。  
→イギリスは（ ）将軍を送ったが、マフディー軍に敗れてスーダンの重要拠点ハルツームを占領された。  
→1898年によりやく鎮圧し、1899年にイギリスとエジプトの共同管理とした。



マフディーとは、「救世主」という意味である。彼自身はすぐに病没したが、反乱は長く続いた。

ムハンマド=アフマド



中国での活躍から、本名をもじってチャイニーズ=ゴードンと呼ばれていた。その後はスーダン南部の総督として、アフリカに派遣されていた。

ゴードン将軍



英雄ゴードンの戦死は、イギリス国民の政府批判を巻き起こし、ついにはグラッドストーン内閣の退陣にまでつながった。

追いつめられるゴードン

- ・ケープ植民地がイギリス領となった後、オランダ系の（ ）は北上して黒人勢力を征服した。 ※この北上をグレート=トレックという。
- ブール人は（ ）と（ ）を建国した。
- 19世紀の後半に、両国で（ ）と（ ）が発見された。
- 1899年、イギリスは、植民地相（ ）や、ケープ植民地の首相を務めた（ ）の指導でこの両国へ侵攻した。
- ※この戦争を（ ）という。
- ゲリラ的な抵抗にあって大苦戦したが、1902年になんとか征服した。



☆（ ）(1910~1961年)

- ・1910年、イギリスの自治領として南アフリカ連邦が成立した。
- 白人優位の人種隔離政策である（ ）を行った。
- ・またセシル=ローズは、南アフリカの北方を征服して植民地とした。
- そこを自分の名前にちなんで（ ）と名付けた。
- ※現在の（ ）(南部)とザンビア(北部)を合わせた地域。



ジョゼフ=チェンバレン

グラッドストーン内閣で植民地相を務め、帝国主義政策を推進した。息子2人も有名な政治家である。



ブール人のゲリラ

ブール人はアフリカーナーとも呼ばれる。軍事力で劣るブール人は、イギリスをゲリラ戦に誘い込み激しく抵抗した。イギリスは苦戦し、莫大な兵力と戦費を消費してしまった。



セシル=ローズの風刺画

アフリカのナポレオンと呼ばれ、帝国主義政策を推進した。アパルトヘイト政策にも関与している。この風刺画は有名ですね。

